

参考文献

- 大木充・西山教行編 (2011)『マルチ言語宣言—なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』京都大学学術出版会。
- 河原俊昭・山本忠行編 (2004)『多言語社会がやってきた—世界の言語政策Q&A』くろしお出版。
- 塩澤 正・吉川 寛・石川有香編 (2010)『英語教育と文化—異文化間コミュニケーション能力の養成 英語教育学体系第3巻』大学英語教育学会監修、大修館書店。
- ホッフア、ベイツ・本名信行・竹下裕子編 (2009)『共生社会の異文化間コミュニケーション—新しい理解を求めて』三修社。



観光業が先導する表示の多言語化 関西空港 2010年 (撮影：庄司博史)

第9章

言語接触と言語混交

ダニエル・ロンゲ

本章のねらい

異なった民族が接触するとそれぞれの言語は相互になんらかの影響を受けあいます。これを言語接触と言います。借用語とは、相手の言語から個別単語を取り入れたりする、影響の程度が軽い現象ですが、時には二つの言語が入り混じるといって、より重大な影響が見られることもあります。これらを言語混交と言います。近年において、日本語以外の言語(ポルトガル語、韓国語、中国語、英語など)が日常的に日本国内で使われるようになっていっていますが、こうした「多言語状況」がかつてないほどの変化を日本語にもたらすと考えられます。本章では、言語接触で起きる様々な現象を解説しながら、すでに始まっている日本語と他言語との言語混交のあり方について考察してみます。

9.1. ことばの接触

社会的背景

言語(そしてその使い手である民族)が接触する理由は多数あります。たとえば、宗教圏の拡張、軍事的侵略、自然災害による飢饉など生活環境の悪化や人口過剰などにより新天地を求める移民・移住、さらに近隣文化からの知識の取りこみなどをあげることができます。これらの理由は「世界史では思い当た

るケースはおおくありますが、日本ではあまりピンとこない] ように思われるかもしれませんが、けっしてそうではありません。これらの現象は全て日本の歴史でも起きており、これらの歴史的出来事によって日本語が少しずつその姿を変えているのは事実なのです。ペルシア語やインドネシア語にアラビア語起源の単語が多いのはイスラム教の広がりによる言語接触現象ですが、そもそも「若旦那」や「だるまさんが転んだ」といったごく日常的な日本語の中にも仏教の伝来によって日本語の一部になった借用語が含まれています。英語は元々ヨーロッパ大陸の言語です。アングロ族やサクソン族がブリテン島を侵略し持ち込んだのです。後に隣の島アイルランドを侵略することでさらに英語の使用地域を広げました。英語が現在のオーストラリアやニュージーランド、米国、カナダなどに広まったのは大量の移民がそれらの土地に渡ったからです。このように人びとの移動にともない、元々その地域に住んでいた民族と新しく入って来た民族の言語が接触し、お互いに影響を受けあうことがあります。

同系統の言語変種（方言）どうしが、統一国家を作り上げる勢力によって接触することもあります。日本の場合は大和統一政権の拡大によって、京ことばが他地域の方言に比べて勢力を増していきました。柳田國男が指摘した方言の周囲分布は、京のことばが近隣地域へと放射拡散することによって起きた言語接触現象です。幕府が江戸に移ると今度は、関東方言であった江戸のことばが西日本諸方言の影響を（語彙面や文法事項などの面で）受けます。特に江戸語、東京語、そして現在の標準語の改まった言い方（丁寧体、敬語）には西日本方言との接触によって入った文法事項が使われています。本来の関東方言の形容詞の活用は「寒く〜」とクを挟んでいましたが、現代の標準語で丁寧に言う時に使われるウ音便（寒うございます）は西日本方言との接触によって江戸語に入ったのです。同様に、関東方言の否定辞は「〜ない」で、「〜ん」は西日本の言い方ですが、現代の標準語で丁寧体の否定辞として使われている言い方は「〜まさない」ではなく、西日本諸方言の影響が見られる「〜ません」です。

近世になって、日本語の影響が蝦夷地や琉球へ及ぶようになると、日本語起源の借用語が北海道アイヌ語や沖縄本島の琉球語に現れるようになります。そ

れと同時に日本語の中にはアイヌ語起源の単語（コンブ、トド、オットセイなど）や沖縄語起源の単語（シーサー、ゴーヤ、チャンプルー、エイサーなど）が見られるようになります。こうした借用語も結局言語接触の一現象です。江戸末期～明治時代初期に日本人（主に八丈島民）が小笠原へと入ったのも開拓ですが、そこで八丈のことばと小笠原諸島で形成されつつあった英語が入り混じる混合言語が誕生しました。松前藩や屯田兵が北海道へと移住したように、ハワイやカリフォルニア、カナダ、ブラジルなどへ渡った日本人もいました。ハワイのいわゆるピジン英語への日本語の影響も見られます。アメリカ本土で「トリハダ」のことを goose bumps（ガチョウのイボ）と表現しますが、ハワイ英語で使う「chicken skin」は日本語の直訳だとされています。反対に各地の日系社会で使われる日本語も現地語の影響を受けています。ブラジルの日本語では（ポルトガル語の jugar を直訳して）「野球する」ではなく「野球を遊ぶ」と表現します。

異なった言語を話す人々が接触し、コミュニケーションするときに言語接触が起こります。結果として様々な言語現象が起きますが、次節ではまず、個人レベルで起きる言語接触現象を取りあげ、フォリナー・トークと中間言語、コード切り替えについて考察します。そして次々節では、言語体系レベルで起きる借用語とピジン、クレオール、混合言語について考えます。

9.2. 個人レベルで見られる言語混交の形態

フォリナー・トーク

相手は自分の言語が十分に理解できていないと思う時、フォリナー・トークと呼ばれる単純化されたことば（専門用語で「簡略化された言語使用域」）に切り替える人がいます。フォリナー・トークはその場限りの短期的な現象で、個人差の多い言語接触現象でもあります。それでもフォリナー・トークで見られる方略（コミュニケーションストラテジー）の分類・分析は可能です（ロング 1992、徳永 2003）。フォリナー・トークを直訳すると「外国人ことば」とな

りますがこの現象はあくまでも「外国人に向かって母語話者が使うことば」のことを指します。外国人自身のしゃべりに注目しているのは次に取り上げる中間言語の研究です。

中間言語

異なった言語を話す人々が接触する場合、相手の言語を話そうとする人、学ぼうとする人がいます。人間は十代の半ばまでは外国語（第二言語）をほぼ完璧に覚えることができますが、こうした言語形成期（臨界期）を過ぎると、文法事項の使い方を間違えたり、単語の意味や使用法を勘違いしたりすることや“変な発音”（外国人なまり）で話すことがあります。こうした間違いにもそれなりの「規則性」（間違いのパターン）が見られることから、1970年代から非母語話者が話すことばを一つの言語体系として捉える「中間言語」の研究が進んでいます。話者の母語が出発点で、覚えようとしている目標言語がゴールだとすれば、こうした規則的な間違いを含む、非母語話者が話す言語体系は、その中間に位置づけられることからこう命名されました。

日本で暮らしている外国人の日本語を聞いていると、本人が言ったとたんに自ら言い直す「口が滑った」ような間違いも出てきますが、本人が間違いだと気づいていない誤用も現れます。言語習得論では前者をミスタイク、後者をエラーと区別して扱っています。エラーの原因が母語にある場合もあります。例えば、ペルー人が「音楽は鍵の心だよ」と言ったとすれば、これはおそらくスペイン語では語順が逆で、「la llave (鍵) al corazón. (心)」となるからでしょう。

しかし、中間言語の面白いところは母語で説明できない特徴にあります。例えば、母語の異なる外国人がみんな同じ誤用を起こすことがあります。「むずかしい質問」を「むずかしいの質問」と表現するのは、形容詞と被修飾語の名詞との間に「の」を入れてしまう誤用ですが、英語、中国語、フランス語、インドネシア語など様々な言語の話者に同じ誤用がみられます。中国語では「困難の問題」のように「的」を挟むため、これは母語の影響かと思われるかもしれ

ませんが、英語はdifficult questionであり、「的」や「の」のような機能形態素は使われていません。またフランス語 (question difficile) やインドネシア語 (pertanyaan質問、sulitむずかしい) はこうしたつなぎのことばが使われるかどうか以前の問題で、語順が日本語と逆になっています。こうした問題は奥が深くて、複雑（中国語は「的」が使われない場合があり、英語にはpeople of colorのような被修飾語・修飾語の語順も存在し、フランスやインドネシア語ではこれ以外の語順もある、など）ですが、むしろそれがポイントであり、この誤用を簡単に「母語の影響だ」と決め付けるのは良くありません。原因は母語にあるというより、日本語の「の」の使い方に関する理解が足りなくて、「妹の質問」の構造からの類推で起きていると考えた方が良さそうです (ロング 2010)。

関西地方で暮らす在日コリアン1世の日本語の特徴を研究した人は、中間言語とも言える、一個人を越えた誤用のパターンを見つけました。例えば形容詞の否定形にオイシナイ、オモロイナイ、チイサイナイなどが使われました。関西方言でそれぞれをオイシナイ、オモロナイ、チイサナイのようにクを挟まない形で言うので、その影響もあると思われます (金智英 2005)。しかし、中間言語研究でよく見られる文法事項の合理化や単純化も働いているでしょう。すなわち、標準語の文法事項（形容詞の原形のイを外し、クを挟み、ナイを後ろに付ける）や関西方言のそれ（形容詞の原形のイを外し、ナイを付ける）よりも中間言語の規則（形容詞の原形にナイを付ける）の方が単純（覚えやすいし、運用しやすい）です。なお、在日2、3世になるとこうした中間言語的特徴が消えます。バイリンガルであること、または「アボジ、オモニ」（お父さん、お母さん）のような借用語彙を日本語に混ぜることでアイデンティティを保持する者もいて、「在日語」という用語を用いる学者もいます。しかし、多くの在日コリアンは住んでいる地域の「日本民族」の話者とまったく変わらない日本語（関西なら関西弁）を使っており、「民族方言」（エスノレクト）が発展しているとは言いがたいでしょう。

在日コリアンと同じように日本語を第二言語として習得した旧植民地のい

わゆる「残存日本語」の話者にも中間言語的な特徴がみられます。パラオやサイパンを始め、旧南洋庁地域の話者には単純化された可能表現（誤用）が現れます。例えば「乗れない」という意味でサイパンの人が使った「乗るのできない」という誤用は、恣意的で説明不可能のものではなく、「乗るの（は）上手」、「乗るの（が）好き」といった表現からの類推と考えられます。しかも、中間言語によくみられる「分析的 (analytical)」で「透明性の高い (transparent)」言い方へと変化しています。すなわち、中間言語の「乗るのできない」に比べて、母語話者の「乗れない」の方はそれぞれの部分がどのような役割を果たしているかは不透明です。前者は「乗る+の+できない」に三つの部分に「分析」することが可能ですが、「乗れない」の「れ」の意味は何かと考えれば、語幹の子音に可能の意味を表わす母音「え」が融合しており、どの部分が可能の意味を表しているかは言いがたいのです。

コード切り替え

同じ会話の中で一つの言語変種から別の言語変種に切り替える行動をコード切り替え（またはコードスイッチング、コード交換など）と言います。

例えば、友人のホームパーティで知り合った、日本語が話せるアメリカ人 (John) と英語が話せる日本人 (まり子) との間で次のような会話が繰り広げられていることを想像してみてください。

John : So I've been living in Japan about seven years. What about you?

まり子 : Oh no, I'm Japanese. But I grew up in San Diego. ジョンさん、7年だったら日本語しゃべれますね？

John : まあ一応。……いいですね、苦労せずにバイリンガルに育てられて。うらましい。

まり子 : まあ、苦労しなかったというか、I guess I had it easier than some people cause I spoke English at school and、何と言う

か、家に帰ったら日本語だったからね。ジョンさんはでも you must have studied ころ、一生懸命だったでしょう？

John : I がんばる ed a lot my first year in Japan. I studied about 三時間勉強したよ。

この会話では、文と文との間で言語を変える文間コード切り替えも、文中コード切り替えも両方現れています。そして最後の文のように、同じ情報 (study, 勉強) が両方の言語で重複して現れるものをポートマントー文と言います。コード切り替えは以下で取り上げる混合言語の形成過程と関わる重要な要因の一つです。

日本各地 (長崎、神戸、横浜など) には華僑コミュニティがありますが、少なくとも横浜では「我東京行って来た」のように中国語と日本語による文中コード切り替えがみられます。しかし、バイリンガルな状況は必ずしもコード切り替えという行動を生み出すとは限りません。沖縄県の石垣島にある台湾系島民のコミュニティでは閩南語と日本語が両方使われますが、コード切り替えではなく、場面 (場所、相手、状況など) による使い分けが一般的です。

9.3. 言語体系レベルで見られる言語混交の形態

借用語

言語的影響の最も表面的な現象は借用語、つまり個別単語がX語からY語へと入っていく現象です。西洋諸言語から日本語に入った外来語や古代中国語から入った漢語も、日本語から外国語に入った単語（「外行語」と呼ぶ人もいる）もこれに当たります。第一次世界大戦から第二次世界大戦の30年の間、日本の統治下にあったパラオでは skoki, skozio, hadasi (飛行機、飛行場、裸足) などが現在もパラオ語として利用されています。日本語には和製英語があるように、日本語起源のパラオ語の中には意味が変化しているものもあります。cheki, chude (綴りの ch は母音前の声門閉鎖音を表わしているため、日本語

の発音とさほど変わらない)はそれぞれ「液」と「腕」に由来しますが、意味の特殊化が起こり、それぞれ「蓄電池で使用される希硫酸」や「二頭筋、力こぶ」を表わします。また「遅い」と「軽い」に由来する *osoi, karui* は「到着が遅れている」や「仕事のがろい」、「荷物が重くない」や「焼けどの程度が深刻ではない」といったニュアンスで使われず(そうした場合に従来の土着語のパラオ語単語が用いられる)、それぞれ「夜遅く」と「へっちゃらだよ」という特殊な意味(意味領域の縮小)のみで用いられます(大橋&ロング 2011)。借用語が生じることによってY語の辞書に掲載される単語が増えます。この意味において、Y語における言語的影響は長期的と言えますが、「その場、その場」だけで起こる短期的な言語接触現象もあります。

ピジン

異なった言語を話す人々が長時間にわたって接触し続けることがあります。物々交換、侵略、奴隷売買、宗教の拡大など様々な理由があります。二つの言語だけが接触すると片方の人が相手の言語を習得することがあります。自然習得であるゆえに、中間言語的なものになりますが、時期が(数年間、数十年間のように)長期化すると段々正確な方向へと向かいます。しかし、三つ以上の言語を話す人がこのよう長期的に接触を行っているとピジンと呼ばれる言語変種が自然発生的に形成されていきます。力を持っている人たちの言語を、そうでない人たちが話そうとするからです。力のアンバランスは様々な要因によりますが、例えば、人数が多い、優れた技術を持っている、武力で他の民族を抑えているといったことが挙げられます。これまで世界中でピジンが100以上報告されていますが、その多くは英語やフランス語などヨーロッパ諸語がからんでいるもので、地域としてはカリブ海、西アフリカ、太平洋のメラネシアに集中しています。これは言語学的に必然性があるというよりは、この2、3世紀の歴史的状況がその背景にあります。おそらく何千年も前から、人間が地球上の様々な地域で接触を行なった度にピジンのような接触言語が生じたと思われれますが、その記録が少ないだけです。

19世紀半ばから後半にかけて、横浜でピジン日本語が発生したことは当時の記録から分かっています。当時はイギリスやアメリカを始め、英語を話す人と中国南部出身者を中心とする華僑が集中していました。場所は日本であり、日本人が多かったため、日本人が彼らの言語をしゃべろうとして、ピジン英語やピジン中国語が発生したわけではありません。単純化された日本語が三つの民族の共通言語(リングフランカ)となったのです。しかし、「単純化」とは言え、それぞれの民族が単純化された日本語を使っていた理由は異なります。英語圏や中国の人は日本語のむずかしい文法事項が把握しきれなかったため、中間言語的(よって単純化された)日本語になったのです。日本人のこぼにみられた単純化はむしろ、むずかしい日本語にはついていけない外国人への配慮、つまりフォリナー・トーク的なものでした。

1879年横浜で刊行された横浜ピジン日本語の教科書からいくつかの例を見ましょう。

1. ワタクシ ナガイ シャポー アリマス?
(意味: 高い帽子が欲しいです。)
2. ハウス アリマセン。スコシ ハイキン マロマロ アリマス。
(私はこの家の住民ではありません。私は色々なところを回っている見物しているだけです。)
3. マー チャパチャバ シンジョウ。
(馬に餌を与えなさい。)

これらの例文からわかるように、単語のほとんどは日本語ですが、陳述文と命令文、疑問文と断定文、現在形と過去形と進行形といった文法事項がほとんど無視されているため、このしゃべり方に慣れていない日本人にはまったく意味が通じません。また、これは外国人の間違いだけではなく、当時の記録から、日本人も外国人に向かってこれと同じような話し方をしていたことが分かります。これがピジンです。つまり、ピジンは「何でもあり」のしゃべり方ではな

く、個人や民族（母語）によって差が見られるものの、教科書を作成することが可能であるぐらいコミュニティ内部では均一化されたものです。そして、日本語と比べて文法が極端に単純化されているとはいえ、ピジンにはピジン特有の文法規則が存在するのです。

クレオール

ピジンがコミュニティ言語として使われているところで生まれ育った子どもたちはそれを母語として習得します。そうすると不思議なことにコミュニティの子どもたちの中でピジンの複雑化が起こります。ピジンはその使用者にとってあくまでも補助的な言語なので、考えていることが細かく表現できなくても良いのです。しかし、子どもたちにとっては母語であり、思考言語となると、彼らが考えられること（過去形であれ、仮定法であれ、連体修飾節が入った複文であれ）は全部言えるようになるのです。別の言い方をすると、子どもたちはどんな発想でも表現できるように、文法事項をつくってしまうのです。そうした完全な言語、再構築された言語のことをクレオールと言います。

20世紀の台湾でそうしたクレオール日本語が発生しました。日本人から見れば「ブロークン（崩れた）日本語」に聞こえるかもしれませんが、独自の文法規則が形成されています。例えば、キノ サムイ シナイ（昨日は寒くなかった）やイマ サムイ シナイ（今は寒くない）と使うのに対し、アシタ サムイ サン（明日は寒くない）と言い、標準日本語の複雑な形容詞過去形を作るルール（イを落とし、クを挟み、ナイを付け、イを落とし、カッタを付ける）が単純化されています。2つの否定表現のシナイとサン（センの音変化？）は両方とも日本語から来ていると思われませんが、それぞれが已然形と未然形として使い分けられています。しかも、ピジン日本語と違って、この宜蘭県クレオール日本語（現地では寒溪泰雅語と呼ばれている）は当該地域の中老年層の人々の母語（第一言語）となっています。

混合言語

小笠原諸島では先住民が話していたハワイ語や英語と後から入った日本人開拓者が話していた八丈語（八丈島方言）などが入り混じった混合言語があります。ピジンに見られる単純化やクレオールに見られる文法体系の再構築があまりなくて、英語と日本語がほとんどそのまま同一文内で入り混じった形で融合しています。例えば、「Yesterday, meらは松木ドクターとカノに乗ってボービタイの前でfishingをしたけど、nobody caught any ヌクモメ」のような発話が聞かれます。小笠原混合言語の特徴はいくつか見られます。独特な地名（防備隊）やハワイ語起源の動植物名が見られます。英語は時間関係の語彙や人称代名詞など特定の語彙に現れます。そして、オ段とウ段の母音混同が見られる八丈語の影響を受けた英語起源の単語（カノ＝カヌー）や、日本語の語順に変わった英語の表現（松木ドクター）もみられます。小笠原混合言語は元々コード切り替えに始まりましたが、現在の中老年層の話者にはそれを第一言語として習得したため、混合言語の文法性判断が可能です。つまり、外国人が「私が電車を乗る」と言ったときに、日本人は「それは日本語として間違っている」と判断できるように、日本本土から来た人が適当に日本語と英語を混ぜて使えば、欧米系島民は「that sounds funnyだじゃ」という否定的な文法性判断を下すかもしれません。例えば、上述のコード切り替えの例にあった「がんばるed」のように日本語の動詞に英語の過去形-edを付けることは、本土のバイリンガルの人が使うことがありますが、小笠原混合言語の文法規則ではだめなのです。混合言語は「なんでもあり」の言語行動ではありません。

9.4. まとめ

さて、上で言語接触を主に移民との関係で見てきましたが、紙幅の関係で日本語話者にみられる様々な言語接触現象は取り上げていません。標準語と方言との接触によって生まれたネオ方言、沖縄や奄美のウチナーヤマトウグチやトン普通語、日本手話を日本語の語順や文法構造に当てはめたことでできた日本

語対应手話などはこれに当たります (⇒14-9)。

本章で取りあげた諸現象は言語学的に重要で研究課題を与えてくれますが、現代日本社会にとっても重大な課題です。日本に入ってくる移民が増えれば増えるほど言語接触が頻繁に起こるからです。ここで考察してきた様々な現象を生み出す社会的・歴史的要因はこれから研究しなければならない課題です。

念頭に置かなければならない点があります。標準的な日本語が使いこなせない移民出身の住民が就職活動など生活面で不利になることがよくあります。日本語母語話者が標準語ではなく方言をしゃべる時と同様に、移民が母語と日本語を混ぜたり、あるいは中間言語的な日本語を使ったりしている時は頭が悪いと偏見で判断されがちです。しかし、言語的に言えば接触言語の使用と知能の低さはまったく関係ありません。それどころか、上でみたように、中間言語は自然習得に伴うものであり、それを使う者は文法を教わることなく、自分でそれを見出している (推測している) ということなので、人間が驚くほどの知能を備えている証拠とも言えます。そもそもネイティブの間でみられる言語変化 (19世紀の「形容詞+です」、20世紀のら抜きことばなど) は最初誤りや乱れと非難されますが時が経つにつれ、普通の日本語として段々認められるようになります。また20世紀の間に日本語の方言は矯正すべきものから許容すべきものへと国民の意識が大きく変化しました。使う本人の意識においても、方言は劣等感から地元アイデンティティのシンボルへと変わりました。似た現象として、英語やドイツ語圏などにおいて移民1世の接触言語が2世、3世になると民族アイデンティティの象徴となっています。米国のドイツ系移民が数世代前に持って来たペンシルバニア・ダッチやアジア系移民の間で形成されたハワイのピジン英語、ドイツのトルコ系移民の間で発展したKiezdeutschなどはこうした「民族方言」(エスノレクト) に当たります。小笠原の混合言語も長年米軍から「出来損ないの英語」、本土の日本人から「出来損ないの日本語」というふうに非難され、使う本人たちの劣等感や自己嫌悪につながりましたが、近年少しずつ欧米系の人びとがこれに誇りを持つようになってきました。

このように接触言語が「民族的変種 (ethnic variety)」へと定着するか、一時

的な現象として1世と共に消えるかは社会的、言語的要因によって左右されますが、それら複雑に関係しあっている実態はまだ解明されていません。例えば、少数派コミュニティの構成員が少なければ少ないほど多数派のホスト社会に吸収されやすいと思われがちですが一概には言えません。上述した日本の最大のマイノリティである在日コリアンの言語的特徴はあまり残っていませんが、200人弱の小笠原欧米系は混合言語を作り上げています。また、コミュニティの歴史の長さは必ずしも接触言語の特徴の保存にはつながりませんが、個人差を超えて均一化された言語変種に落ち着くのに年月がかかるのも事実です。経済力も無視できない要因です。石垣や横浜で自営業を営んでいる華僑と茨城県の海産物缶詰工場で単純労働に従事しているインドネシア人を言語維持の観点から同じ基準で比較することはできません。さらに、言語的距離も重要で、日本語との類似点が多く見られる韓国語と違いの大きいポルトガル語はそれぞれ異なった言語接触状況を作り上げるのは当然のことで、言語混交のあらわれ方にも差が出てくるといえます。

参考文献

- 大橋理枝、ダニエル・ロング (2011)『日本語からたどる文化』放送大学教育振興会。
カイザー、シュテファン (2005)「Exercises in the Yokohama Dialectと横浜ダイア
レクト」、『日本語の研究』1巻1号、35-50頁。
金智英 (2005)「在日コリアン1世の否定表現の運用」、真田信治・生越直樹・任榮哲
編『在日コリアンの言語相』和泉書院、141-158頁。
真田信治・簡月真 (2008)「台湾における日本語クレオールについて」、『日本語の研
究』4巻2号、69-76頁。
徳永あかね「日本語のフォリナー・トーク研究」、『言語文化と日本語教育』増刊特集
号、162-174頁。
ロング、ダニエル (1992)「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォ
リナー・トークを中心に」、『日本語学』11巻13号、24-32頁。
ロング、ダニエル (2010)「日本語習得者が作る日本語文法」、『日本語文法』10巻2号、
39-58頁。